

人物紹介

ふじたみちのぶ
藤田道宣さん(24歳)
【熊本県上天草市 観乗寺出身】

西山別院には、毎週日曜日に近所の子供たちを集めて仏教教育を行う「西山仏教日曜学校」があります。仏様に手を合わせやすい心を育むと共に、各種レクリエーションや時には遠足に出掛けたりと子供たちの楽しみの場でもあります。校長は別院輪番が務め、実地の教育指導は龍谷大学や京都女子大の有志学生が行います。

藤田さんは、熊本県上天草市の寺院出身で浄土真宗本願寺派僧籍を有す二十四歳。六年前、龍谷大学進学後「西山仏教日曜学校」教諭として、毎週日曜日、子供たちの教育に当たって下さいました。



大江輪番と藤田さん 浄土真宗本願寺派研修道場にて (2011.3.3)

故に遭い下半身が麻痺するという重傷を負いました。しかしながら懸命のリハビリを経て、翌年には大学復学を果たします。同時に「西山仏教日曜学校」にも復帰し、車椅子で通いつつ、教諭の任を最後まで務めました。

一見すると物静かで温和な好青年の藤田さんですが、身体を動かすことが大好きといえます。現在も大阪で車椅子のテニスサークルに参加するなどスポーツを楽しんでいます。元々名門平安高校フエンスング部に

所属していたスポーツマン。北京オリンピック銀メダリスト太田裕貴選手の一年後輩に当たり、大学選手権では7位入賞の手腕でした。その経験から、昨年アジアパラリンピックフエンスング競技日本代表に選出され、中国広州まで遠征。惜しくも予選敗退の結果に終わりましたが、来年開催のロンドンパラリンピックを目標に練習を重ねています。

このように、ハンデをもつとせず精神的に活動する藤田さんの力の源はどこにあるのか？それは家族、親戚、友人達など多くの支えだといえます。パラリンピックの出場も太田裕貴選手の励ましがあつたからこそ成し得たもの。今でこそ思い悩むことは殆どないものの、怪我を負った当初は、当然のことながらひどく落ちこんだそうです。人々の支えがなければとても立ち直ることは出来なかつた。そう考えると、今度は自分がその支えになりたいと思うようになりました。自分が悩み苦しんだ分、同じように苦しんでいる人の気持ちがわかる。その方たちが救われるよう精神的なサポートをしたい。

そんな思いから大学卒業後は中央

仏教学院に進んで仏法の研鑽に励み、他では医療福祉におけるターミナルケアなどの実践者を育成する「ビハーラ活動者養成研修会」に参加するなど活動の幅を拡げています。

今年の四月からは、西本願寺で読経などの儀式を専門的に追及する「勤式指導所」に通い、僧侶としての磨きをかけながらも、「福祉に惹かれる」という藤田さん。将来は寺院だけでなく、医療施設にも携わり人々の支えになりたいと、静かに、しかし力強い言葉で抱負を述べられました。



久遠

本願寺西山別院報

〒615-8107
京都市西京区川島北裏町29番地
Tel : 075-392-7939
Fax : 075-394-4416
発行者：大江智朗

★「浄土真宗の生活信条」を味わう

み仏の恵みをよろこび

輪番 大江智朗

天地自然の恵みは莫大であります。これがないければ私たち生物は生存できません。しかし、万人はその恩恵を受けていながら、恩恵を受けている事実気付かないまま生涯を終える人もいます。「み仏の恵み」も同様です。「み仏の恵み」はすべての人に開かれているのに、それを感知せずして死んでいく人も多いのではないのでしょうか。「み仏の恵み」とは、お釈迦様、ブッダが教えて下さった仏へ成る道です。仏に成るといふことは、死人に成るといふことではありません。仏教は死への不安の解決であり、死という偶像の破壊の営みです。そして、親鸞聖人がお示し下さった「み仏の恵み」を受ければ、さらに人生が純化され、深められ、充足されて、内面的に別の意味で、計りしれないほど豊かな人生が展開さ

れます。

さて私たちの現実、自己中心であり、その結果、争いや妬み怨みを生み不平不満の灰色どころか、闇の夜に疑心暗鬼、まさに「渡る世間は鬼ばかり」の、孤独で、さみしい人生で終わりがちです。

私の浅はかな知識や能力では、如何に努力し頑張ってみても、その空虚な人生から脱却することは不可能です。

このどうしようもない、あわれな私を見捨てることのできず、煩惱すくめの私の五体の地獄行きのこの私を、真実の世界に導いて下さるのが、如来回向の名言です。本願力です。如来さまが、迷いの私を目覚めさせ、真実に生かすため恵んで下さったのが南無阿弥陀仏の念仏です。

念仏は呪文でもなければ、まじないでも、気休めでもありません。

念仏は仏さまからの聖なる恵みです。宇宙の真理が、如来の智慧となり慈悲となって私の煩惱の身に入って信心となり、口に出たのが称名であり、拝む手となり、報恩感謝の日暮らしとなります。

如来さまから恵施された名言のはたらきを、私の全体で受け入れることが、浄土真宗の信心です。死にゆく身の私が、永遠に生か

される身に変身されるから、大きなよろこびが生れます。変身するといっても、私が偉くなったたり賢くなるわけではありません。むしろ、如来の智慧を頂いたら、今まで見えなかつた「ご恩」や「お陰」が分かるようになり、煩惱の目では気付かなかつた自分の影が浮き彫りにされて「恥ずかしく」なります。恥ずかしいから少しでも恥ずかしくないように心がけ、たしなみの心が生れます。

如来の慈悲と智慧を頂いた上からは、「俺が。オレガ」ではなかつた、すべてお陰さまであつたと周りの人々を拝み、敬い、助け合つて、社会のために尽くしますの活力ある人生が展開されます。

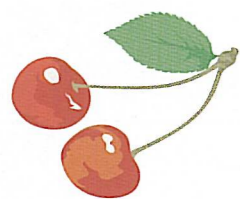
「み仏の恵みを喜び」日暮らしほど幸せな人生はありません。喜びといっても、いわゆる喜怒哀楽の喜びではありません。他力回向の真実の信を得るところに、人間の根源的な願いが充足されるからです。

【三】

★浄土真宗の生活信条

(四)

一、み仏の恵みを喜び
互いにうやまい助けあい
社会のために尽します





浄土真宗別格本山 西念寺 茨城県笠間市稲田469

親鸞聖人、関東ご在住時代の拠点「稲田草庵」に建てられた浄土真宗の寺院。「教行信証」の執筆はこの地で始められた。「御杖杉」「見返り橋」など聖人ゆかりの伝承が残る。鎌倉時代の十一面観音像と室町中期の山門(写真④)は重要文化財に指定されている。

常陸国稲田(現茨城県笠間市稲田)の領主であった稲田九郎頼重の招きに応じ、この地に草庵を結んで落ち着かれました。現在、その草庵跡には西念寺という浄土真宗の別格本山が建立されており、「稲田草庵」または「稲田御坊」と言われています。親鸞聖人は「稲田草庵」を拠点に、浄土真宗の根本聖典である「教行信証」の草稿を書き始め、約二十年間をこの地で暮らされました。親鸞聖人の九十年のご生涯の中で最も平穏であつた時代が、ここ関東でお過ごしになられた二十年の歳月といえましょう。



【次号へ続く】

親鸞聖人がこの地で生活をなさり、教行信証を記されたご事跡があつてこそ、今正にこの私に浄土真宗のみ教えが伝わっているのです。



「稲田草庵」西念寺本堂の傍にあるイチヨウの木 親鸞聖人の撒いたギンナンから育ったと伝えられる

★前回のあらすじ

「承元の法難」により、親鸞聖人は京都から越後へと流されました。しかし、聖人は流刑地でただ無為の日々を過ごされたわけではありません。後に著される「教行信証」など多くの深淵なご著作からすれば、聖人にとつての越後時代は、師法然聖人のみ教えを咀嚼し深める重要な「思惟の時期」となつたに違いありません。また同時にご自身の今後の生き方についても徹底してお考えになられたのではないのでしょうか。聖人は流罪を赦免された後も故郷の京都にはお戻りにはなりませんでした・・・



● 稲田草庵と教行信証

関東へと移られた親鸞聖人ご一家は、それから約三年後の建保2年(1214)年、親鸞聖人御年四十二歳の頃、奥方の恵信尼公と子供たちを伴つて、関東へ行くことをご決断なさいました。なぜ聖人が関東に赴かれたのかは不明ですが、考えられる理由としては、世に遍く仏法を弘めよという師法然聖人の御遺訓を基とされ、当時鎌倉幕府が開かれて間もない関東に新たな伝道の可能性を見出されたのかもしれない。

● 関東へ

承元元年(1207)の承元の法難によつて、越後へ流罪の身となられた親鸞聖人は、建暦元年(1211)年十一月十七日によつやく赦されました。しかしながら、同じときに流罪となられた師の法然聖人は、その二ヵ月後、京都において八十歳でお亡くなりになられ、その訃報は越後の地におられた親鸞聖人のもとにも届きました。師匠の死は、親鸞聖人にとつて大変な悲しみであつたに違いありません。京都に帰る意義を見失つた聖人は、なおも越後に止まるのでした。

板敷山 大覚寺

茨城県石岡市大増3220

浄土真宗本願寺派の寺院。「弁円濟度」の舞台となつた板敷山の麓に位置する。弁円ゆかりの法螺貝や薙刀などが伝えられている。



今回の写真と記事は、昨年9月19日、婦人会の皆さんと、親鸞聖人のご旧蹟を巡って、関東を旅行した際のものであります。参拝先の西念寺そして大覚寺のご住職様より、色々とお伺いしたお話を中心にまとめました。

板敷山にまつわる「弁円濟度」のお話(語り手:大覚寺ご住職)

【底本:「御伝抄」(親鸞聖人の御一代記)西山別院開基、本願寺第三代覚如上人著】

親鸞聖人ご在住当時の関東は修験道が盛んであり、中でも塔の尾(現在の常陸大宮市東野)の山伏弁円は地元で最も権威ある人物だった。聖人は熱心な布教活動を展開し人々の信望を得たが、弁円はこれを妬み殺害を企てる。弁円は先ず弟子三十五名を率いて板敷山で聖人を待ち伏せするも失敗。今度は山頂にある護摩壇で祈禱を行ない、聖人を呪い殺そうとした。しかしそれも叶わず、ついに弁円一味は稲田の草庵に乗り込んだ。弁円と親鸞聖人はそこで初めて対峙するが、聖人は古い友人に接するようにならぬよう弁円を迎え入れる。その大きな心に魅せられた弁円は、たちどころに害心が失せ、後悔の涙を流しつつ聖人に許しを乞うた。そして、山伏を捨てて、浄土真宗の教えに帰し、聖人より「明法房」という名を授けられたのである。

弁円が親鸞聖人に向けたと伝えられる薙刀(大覚寺)

親鸞聖人 七五〇回 大遠忌法要 記念事業



南北築地塀修復工事 平成24年3月完了予定

平成21年度の山門、平成22年度の鐘楼に続き、平成23年度は築地塀の修復を行っていきます。現在、北側の築地塀は屋根の木工事を終え、瓦葺きの準備を始めています。また、南側は木工事中です。

「東北地方太平洋沖地震」義援金

¥218,198.-

2011年5月末日までに頂いた義援金の累計です。全額を西本願寺の「たすけあい募金」に寄託いたしました。皆さまの温かい御志に心より感謝申し上げます。

義援金 募集中

郵便振替口座 N0.00920-4-144099 口座名称:本願寺西山別院 ※通信欄に「東日本大震災」とご記入下さい。

開設しました!

本願寺西山別院ホームページ

西山別院

検索

- ホームページ http://nisiyama-betuin.jp/
● ブログ http://nisiyama-betuin.jp/blog/

